

12月の作家特集

西加奈子

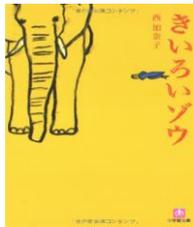
〈作者紹介〉

一九七七年、イラン・テヘラン生まれ。エジプトと大阪府堺市育ち。高校時代、トニ・モリスン（ノーベル賞を受賞した女性黒人作家の「青い眼がほしい」と出会い、最初の一文から完全に）によっていられる強烈な読書体験をする。

関西大学法学部卒業後は就職せずアルバイトとして雑誌社のライターをする。兼業で喫茶店の店番をしながら、暇な時に小説を書き始める。二五歳の時、厳しい環境に身を置く覚悟で上京して、まもなく大手出版社の編集者の目にとまり、「面白い」で作家デビュー。（トントン拍子にコトが運び編集者を詐欺師と疑ったことも）共著も入れると一〇年間で二五冊の作品を生み出し、装画も自ら描く。

〈きいろいゾウ〉

背中に大きなタトゥーがある売れない小説家の武草歩と个性的で自然体の妻利愛子は出会ってすぐに結婚。お互いを「ムコさん」「ツマ」と呼び合い、夏に田舎暮らしを始める。



〈ふくわらい〉

ご近所さんと関わりながらの日常は賑やかに過ぎてゆくが、ムコ宛に一通の手紙が届いたことをきっかけに夫婦間にひやりとした秋風が吹く。そして、冬のある日、ムコは過去と決着をつけるため、ひとり東京へ向う。残されたツマは…。

女性編集者の鳴木戸定は、幼い頃、紀行作家の父に連れられ、世界各国の秘境を旅し、特異な体験をする。その旅の見聞きを綴った父の本は日本で物議をかもし、発禁処分となった。以来、定は世間と自分を隔てる壁を意識し、人と馴れ合わず大人になる。愛情も友情も知らず不器用に生きる定は、愛を語ってくる盲目



の男性や兼業作家のプロレスラーとの触れ合いの中で、自分を包みこむ愛すべき世界に気づいていく。誰かとながっていることの喜びを感じる一冊。

〈漁港の肉子ちゃん〉

男に何度も騙され、日本中を放浪した末にたどり着いた小さな漁港の町。その港にある焼き肉屋に住み込み、やっと腰を落ち着けた母娘。太って不細工な母親・肉子ちゃんは自由奔放でとても明るい。一方、きれいな顔立ちで冷静な娘のキクリンは母を少し恥かしく思い、小学校ではクラスの友人関係に



〈地下の鳩〉

悩む年頃になっていた。恥かしい”なんて言葉を生きているだけで跳ね飛ばす肉子ちゃん。笑いと勇気をもらえる。

大阪ミナミの歓楽街。俺はまだイケていると信じたいキャバレーの呼びこみの吉田。左右の目の大きさがアンバランスな素人っぽいチーママ、みさを。オカマバーの名物ママ、ミミィ。それぞれが背負っている過去と不格好な存在。そして希望のみえない未来。その閉塞感に青空を知らないコン



クリートに囲まれた地下に棲む鳩のよう。過去に囚われることなく、新たな一歩を踏み出すことが大切というメッセージが伝わってくる。

〈食欲の秋〉

作って食べる

食欲の秋。

作って食べるレシピ本はンもちろん

食を考えたたり、物語を読んで楽しんで、

色々集めました



考える

食の地域

ブランド戦力

The 基本



基本。その書名通り、豚汁、ハンバーグ、唐揚げなど、家庭料理の定番とも言える料理の作り方が載っていますこれから料理を始めてみようと思う人にぴったりな一冊和洋中、様々なものが載っていますので、食べたいなと思ったものを作ってみてください。

ちなみに「目玉焼きをきれいに焼くコツ」なんていうのもあります。



サンジの満腹ごはん



「ONE PIECE」のサンジが漫画内で作った料理のレシピ本。さすが、海の一流料理人のレシピだけあって、手が込んでいるものが多いです。

オープンを使用したものが多く、

ダシも市販のものをベースにはしていません（巻末にダシの取り方がのっています）。料理が好きな人やONE PIECEファンにおすすめです。「ONE PIECE」仕事場飯、尾田家の家庭料理。パラッチもあり、おもしろいです。



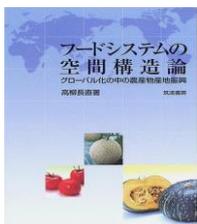
楽しむ

英国一家

日本を食べる



タイトル通り、著者「マイケルブラス」が妻と子供2人と一緒にとにかく食べています。日本滞在はなんと一〇〇日間！「北海道」から「沖縄」まで、ご当地グルメや一見さんお断わりの料亭などなど。また、それだけではなく、味噌釀造、酒蔵、昆布魚の見学もしたり、日本の料理がどのように作られているのかも調べていて、私達の勉強にもなります。文章が堅苦しくなく、とても読みやすいです。



フードシステムの空間構造



食の地域ブランド戦力



アンソロジー お弁当



ご当地グルメを地域の町おこしに利用する自治体は年々増加傾向にあります。昨今の「B・1グランプリ」加熱ぶりをしてみると、それがいかに自治体にとってプラスになっていくのかがよく分かります。本書では「食」をどのようにブランド化し、町おこしをしていったのか。そして、それを持続させるには、等書かれています。第8章の「木の葉をつむものとして」は一時テレビでもよく取り上げられていたのでご存じの方も、いるのでは？

現在日本の農業は、グローバル化によって、縮小傾向にあります。本書では、グローバル化により、フードシステムの空間構造がどのように変動し、日本の農産物産地は、どう対応しなければならぬのかを農業地理学的に説明しています。

様々なお弁当の種類ごとに、様々な作家のお弁当にまつわる話を集めた本です。池田正太郎、山本周五郎から林真理子、よしもとばなな、江國香織など。一話一話が短いので、読みやすいです。また、本の合間に綴られている様々な職業、性別の方のお弁当の写真も良いです。まずは、目次を眺めて気になる話を読んでみてください。

12月の復刻版 森

雁 (大正4年)

薄幸の女性、お玉の儂い憧れと挫折を周囲の人物や情景描写も絡めて味わい深く描きだした作品。

飴細工売りをしている父親の愛娘であった従順で善良な性格のお玉は、高利子貸しの男に目をつけられ、口説かれて妾に囲われていた。自分に対して手厚く遇する男を有難いと感じていたが、相手が高利貸しとわかり、次第に分け隔てをすることを覚える。



また、お玉は東大の学生の美男で品行のよい岡田という男を好きになる。言葉を交わすようになるも、親密にはなれず岡田は留学してしまう。

東京方眼図 (明治四二年)



地図と区分別合冊の帖仕立木との、ふたつから成り立っている。東京全国を方眼図に区切って、縦(いらは)横(一一)の線に符号と番号をつけ、そこに

鴉外

日本文士階級鑑



明治四〇年に作られた文壇番付。夏目漱石や島崎藤村、野口雨情らが前頭に載っている。森鴉外は明治三七年〜三九年一月まで日露戦争に第二軍軍医部長として出征していたためか、頭取(相撲でいう親方)の部として隠居扱いされている。

女性の文士は別にあり、津田梅子や鳩山春子のような学校経営者や学者・社会運動家もごちゃ混ぜになっている。



検索のための別冊を作った。

別冊に載っている地名もかなり細かいものになっており、探しやす

青年 (大正二年)



明治四二年一月に創刊された文芸雑誌「スバル」に連載していたもので、夏目漱石の「三四郎」に影響されて書かれたもの。登場人物には正宗白鳥や夏目漱石をモデルにした人物も出てくる。

主人公の小泉純一はY県から上京してきた青年で、鴉外が製作した「東京方眼図」をたよりに紹介状を持って作家で記者であると石路花(正宗)を訪ねる。

小泉は東京で暮らしていくうちに医科学生の大村莊之助(漱石)と親しくなり、親に行つた劇をきっかけに未亡人の坂井れい子と知り合いになる。小泉は大村と文学・哲学論争を繰り広げ、世俗の交際にも参加しつつ、坂井夫人に代表される女性に対して様々な内容を繰り広げていく。

即興詩人 (明治三五年)



り、そのため作者自身で予約者を募って歩いていた。

鴉外はドイツ語訳された本書を読み、約一〇年がかりで独訳書から訳した。必ずしも直訳ではなく、西洋の故事に由来する表現を中国古典の表現に置き換えるなど、技巧を凝らしている。明治末期から昭和(戦前)にかけて、鴉外の訳書を持ってイタリア各地を巡礼遍歴した文学者・学者が続出し、また、現在も多くの旅行者が持参している。

アンデルセンの自伝的小説を鴉外が翻訳したもの。

アンデルセンは、2度外遊びをしており、「即興詩人」は2度目の後の執筆されたもので、イタリアでの見聞さと彼自身の幼時からの体験を基にしている。一八三五年に予約出版という形をとっているが、これは彼がまだ作家としての地位が不安定だったためであ